

新型コロナウイルスに関する書籍刊行

新型コロナウイルスによるパンデミックも3年目に入った。外出時のマスク着用がすっかり習慣付き、万が一に備えて私の通勤鞆に忍ばせている予備のマスクも出動する機会がほぼ皆無となっている。ただでさえ人の顔と名前を覚えることに自信がなくなってきているのに、マスクを着用しているときさらに難しい。講義を受けている学生の区別がつかないし、自分のゼミの学生ですら覚えるのに時間がかり困っている。学生がマスクを着用せずに受講できる日が今年こそ戻ってきてほしいものである。

新型コロナウイルスに関して、今年度は本学関係で2冊の書籍が出版（1冊は出版予定）された。1冊は2021年4月に出版された「新型コロナで世の中がエライことになったので関西大学がいろいろ考えた。」である。これは、2020年春に産経新聞社と社会安全学部の共催でスタートし、同年秋には産経新聞社と関西大学の共催で実施した両オンラインセミナーの内容をまとめたものである。その後、社会安全学部では新型コロナに関する諸問題についてのより専門的な書籍の発刊が企画された。これに向けて学部内で定期的にFDセミナーを開催し、教員間での新型コロナに関する情報や認識の共有化を図ってきた。その成果が2022年3月に「検証 COVID-19 災害」と題してミネルヴァ書房から刊行される予定の2冊目の書籍である。いずれも現在進行形のパンデミックの最中に執筆したものである。収束後に答え合わせされることが怖くもあるが、楽しみでもある。

新型コロナの影響は今年度も大学での講義に及び、春学期・秋学期とも原則遠隔授業の期間が設定された。社会安全学部では大阪府の要請や関西大学の基本方針に沿いつつも、学生の修学機会をできる限り確保できるよう努め、ゼミを含めた演習・実習科目や大学院科目については原則対面での実施を継続した。一方で、教員は遠隔授業に関するノウハウを蓄え、遠隔授業ならではの利点を活かした講義も増えている。対面・遠隔の両手法の利点を融合して、学生の満足度がより高くなる授業づくりを今後も模索していくことになるだろう。

さて、本誌「社会安全学研究」は第12巻となり、十二支をちょうど一巡した。社会安全学研究誌が最後に迎えた「寅年」は、社会安全学部にとっては開学の年（2010年）の干支でもある。初心に立ち返って新たなチャレンジに取り組むきっかけとするのも良いだろう。2022年は十干との組み合わせでは「壬寅（みずのえとら）」である。「壬」は「はらむ・生まれる」を意味し、「寅」は「春の草木が生ずる・成長する」などの意味を持つ漢字だそうである。このことから、壬寅は「厳しい冬を超えて万物が芽吹き始め、新しい成長の礎となる年」という解釈ができるらしい。ここは都合よく解釈して、「新型コロナウイルスのパンデミックを乗り越えて、社会安全学部や社会安全学研究誌がますます発展する年」になることを期待したい。

2022年2月

関西大学社会安全学部長・
大学院社会安全研究科長
川口 寿 裕